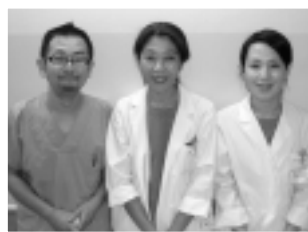


産婦人科

について



加藤 誠(左) 井嶋真理(中央) 小林友季子(筆者・右)

診療科の 特徴



当科では、産科はもちろん、婦人科癌に対する抗がん剤治療、また子宮脱に関しては泌尿科と合同で手術を行なっています。近隣病院の産婦人科閉鎖に伴い、当科への来院患者数は去年よ

り大幅に増加しました。また平成19年度分娩数は331と去年比べて増加しました。

産婦人科医師は井嶋、加藤、小林の3名と浜松医大からの非常勤医師で診療にあたっています。

ハイリスク症例に関しては、科内で十分検討し、近隣の周産期センターや、がん専門病院等への紹介も行なっています。

妊娠中に 気を付けること



“お産は病気ではない” “安全なのが当然” と思っっている方は多いと思いますが、実際妊娠・分娩の過程では予期せぬ病態が起こることがあります。そのため、妊婦健診での指導をきちんと受けることや、母親学級等で正しい知識を得ることも必要です。

22週から36週までの分娩は、早産となります。現在、未熟児治療が発達したと言えども、満期で生まれた場合に比べ、肺をはじめとする臓器の未熟性の可能性があります。おなか張る、出血などは早産の徴候となることもあり、そのような症状がある場合は早めにご相談ください。また、外来で早産徴候を指摘されている方に関しては、自宅安静をお願いし、症状が増悪する場合は、入院管理が必要になることがあります。

また、近年若い世代にもメタボリックシンドロームの影響が及び、妊娠中の糖尿病や肥満が増えています。経過中に管理が悪いと、母体糖尿病の悪化、胎児奇型や胎

児低血糖などの危険性が増します。また、難産や妊娠高血圧症の発症にも大きく影響を及ぼします。ただ、体重を増やさなければいいというわけではありません。近年の研究で、妊娠中の低栄養は、児の飢餓状態を作り、児が生まれたあと、栄養を取り込まなければいけないというプログラムがなされ、長期的にみて肥満や糖尿病、心血管障害などのメタボリックシンドロームになりやすいとも言われています。そのため、過度なダイエットも児に悪影響を及ぼします。

つまり妊娠中太りすぎても、やせすぎても良くないということです。

そのため、良質たんぱく質や野菜を取り入れた、バランスのよい栄養摂取と体重管理が必要になってきます。また妊娠中は便秘や貧血になりやすく、食物繊維や鉄分の摂取も必要になってきます。

外来妊婦健診で生活・食事指導も行いますので、気軽にご相談ください。

また、近年妊娠中の深部静脈血栓症(エコノミークラス症候群)